

経済と経営 47-1・2 (2017.3)

〈論 文〉

コンゴ動乱を巡る先行研究の特徴と研究課題

三 須 拓 也

※本稿は 2017 年に公刊予定の拙著の序章部分である。

1 コンゴ動乱史の修正

歴史は、時代の変化とともに書き換えられる。現代史でも同じであろう。冷戦終結からすでに 30 年近くの時が過ぎ、過去の出来事の評価も変わった。修正の試みは、国際連合（以下、国連と表記）の歴史研究にも及んでいる。

なぜ国連の歴史は修正されねばならないのか。それは、従来の国連史が国連組織にとって忌諱されるべき事実を隠してきたからである。国連の公式資料には、実は国連組織に都合の悪い事実、特に大国に関わった事実が、ほとんど記載されない。それゆえ公式資料に基づく国連研究は、この宿痾から逃れることが難しかった。しかし加盟各国の資料の機密解除に伴って、忌諱されるべき事実の所在が明らかになりつつある。

1960 年から 63 年まで続いた第一次コンゴ動乱にも、同じ特徴がある（以下、コンゴ動乱と表記）。各国政府史料からは、事件をめぐる米国、ベルギー、英国など西側の大国が、秘密裏に直接関与したことが明らかである。例えば植民地利権を有するベルギーや英国は、国連の植民地問題への介入を妨害し、また国連軍最大の支援国たる米国は、コンゴで秘密工作を展開し国連軍をこれに協力させた。しかし国連の公式資料が、これら大国の動向を十分に記載することはなかった。

最も歪められたのが、コンゴ国連軍（United Nations Operation in the Congo）の評価である。法的、制度論的観点が主流の国連研究は、国連事務局の自律性を自明の前提とし、国連平和維持活動を国連の独立した事業と性格づける。歴史家マーク・マゾワーは、国連組織を研究する歴史家が「聖人伝」を書きがちであり、例えばコンゴ国連軍を指揮したダグ・ハマーショルド国連事務総長を、「人類の救世主」として描くと指摘する¹。そしてこれら主流の研究はコンゴ国連軍を、公正中立を志向する国連事務局の指導で展開した国連の事業と描き出してきた。

この評価が、加盟国による国連事務局への影響力行使の問題についての適切な分析を経ているのであれば問題はない。例えば国連事務局が強い指導力を発揮した事実、彼らが力を持ちえた理由、加盟国が彼らの指導に従った背景、などについての十分な答えが提供されるならば、コンゴ国連軍を国連の事業と評価できる。しかし奇妙なことに既存の研究は、この問題意識に乏しい。同情的に評価するならば、彼らの関心は、国連上級職員の政治的理想や構想の解明にあるからであろう。

しかし筆者は、こうした評価は実態に即していないと考える。なぜなら様々な史料には、国連事

務局が大国、特に米国の意向に振り回されていた事実を確認できるからである。そして実際に当時の米英の政策決定者が評したように、コンゴ動乱に武力介入した国連軍は、公正中立な存在などではなく、「米国の事業」と呼ぶべき存在だったのである²。

ではなぜ、各国史料に記された事実が公式史の叙述で回避されたのか。その理由として国連軍固有の事情を指摘できるだろう。この危機の処理には、ハマーショルド、ウ・タントの2人の事務総長が関わったが、彼らを悩ませたのが最大時2万人規模の国連軍をいかに維持し、文民支援活動を成功させるのか、という問題であった。特に活動には、人材、資金、軍事技術、諜報活動の面での米国の協力が不可欠で、この事情が、親米コンゴを作ろうとする米国に国連軍への「構造的権力」を与えた³。コンゴ駐在米国大使が述べたように、米国は「極めて常軌を逸した支配」を国連に行使した⁴。米国は、親米コンゴの樹立に向けた秘密工作に国連を協力させることができたのである。

また、国連組織を取り巻く歴史的背景も、関係しただろう。そもそも国連は第二次世界大戦の戦勝国である連合国を基礎とし、米国の国益追求の「道具」としての性格を埋め込まれた組織であった。この事情は、その利用を積極的に構想したのが大戦の英雄ドワイト・アイゼンハワー大統領であったこと、また国連事務局の人事面において、コンゴ政策の指揮を担ったのが大戦中の米国の諜報活動経験者ばかりであったことから伺い知ることができる。

さらに、国際的な時代背景として、60年代の国連の対応には20世紀後半に現れた帝国主義的国际秩序の変容に伴う矛盾が凝縮されていたことも、国連の公式史が触れられない事実を多数孕ませることになった。すなわち、戦後国際政治史の展開のなかで、ヨーロッパの帝国は解体されアジア・アフリカに新独立国が大量に誕生したが、この50年代後半の国際的な秩序変動と権力情勢の変化が、政治的批判に脆弱な特質をもつ国連組織の公式資料の内容にも影響を与えたのである。

もとよりコンゴ動乱は、50年代後半の脱植民地化の欺瞞が投影された出来事であった。旧宗主国ベルギーは、独立を名ばかりのものにとどめ、経済権益を維持しようとした。これに対して新独立諸国は、この欺瞞を糾すべく植民地問題への国連の積極的介入を求めた。しかし微妙な舵取りを必要とする紛争の処理に際し、国連には積極的介入を可能とする人材、財源などの資源がなかった。端的に言って、国連にはこの紛争を自力で解決する実力がなかったのである。その結果、資源の面で米国に過度に依存せざるをえなかった国連は、秘密工作への協力という形で「米国の道具」への道を歩みはじめた⁵。

本書は、こうした事実と過程を描き出すものである。特に本書は、国連事務局の人的繋がりと平和維持活動をめぐる資金、軍事力といった「介入資源の確保」の問題に着目し、コンゴに親米政権を作ろうとする米国の動向がコンゴ国連軍に与えた影響を考察する。これは、コンゴ動乱及び国連軍の活動の実態をコンゴの現地情勢の変遷との関係で叙述してきた、既存の国連平和維持活動研究とは異なる接近方法である。そして一連の分析を通じて、コンゴ動乱をめぐる既存の著作には歴史実証的に受け入れがたい点が多々あること、またコンゴ動乱における国連の中立性の言説、特に「聖人伝」的なハマーショルドの指導力を声高に唱える国連関係者の公式説明が事実とは異なるもので、實際上国連軍はコンゴ内政に決定的影響を与えた干涉者に他ならないことを明らかにする。

なお、本書執筆の動機と問題意識は、多岐にわたる。第二次世界大戦後の米国は、なぜ、どのように国連を利用しようと考えたのか。またコンゴ民主共和国の建国の歴史とその影響を受けた国連平和維持活動の制度化の歴史的交錯はいかなるものだったのか。加えて、かつて理想の植民地とさ

れたコンゴが、なぜ後に破綻国家の代表と言われるまでになったのか⁶。他方で、コンゴ国連軍をほぼ唯一の例外として、これ以降冷戦期の国連平和維持軍は小規模化し、「戦わざる軍隊」の特質を強めるが、なぜこのような道を歩むに至ったのか。さらに「米国の暴君」と後に呼ばれることになる、ジョセフ・モブツ（後にモブツ・セセ・セコと改名）の独裁体制は、なぜ生まれたのか。その成立に国連軍の活動の影響はなかったのか。これらの問いの手がかりを検討したいと考えたのである。

2 先行研究の特徴

後に「アフリカの年」と呼ばれる 1960 年 6 月 30 日、ベルギー領コンゴが独立を果たした。世界中の多くの外交官がコンゴの首都レオポルドヴィル（現キンシャサ）に集まり、コンゴ人への権力委譲を見届けた。独立式典には、アジア・アフリカ諸国からの大使と並んで、米国や国連を代表する人々の姿もあった。米国からは元ベルギー大使で駐日大使も務めたロバート・マーフィー国務次官と現職のクレア・ティンバーレイク大使が参加し、国連事務局からはラルフ・バンチ国連事務次長が出席した。比較的高位な人々の姿があったことからわかるように、世界の人々がコンゴの独立に注目していた。だがその目には、独立への希望というよりも、むしろ将来への漠然とした不安の色が映っていた。

事実、独立は混乱のはじまりであった。7 月 4 日、独立から 1 週間もしないうちに、コンゴ公安軍兵士が待遇の改善を求めて暴動を起こした。さらに 1 週間後、天然資源の宝庫であったコンゴ東南部のカタンガ州が分離独立を宣言した。これに対してベルギー政府は、ベルギー人の生命と財産の保護を名目にベルギー軍の介入を決断した。他方この措置に怒り狂ったコンゴ政府は、国連にベルギーの侵略から独立したばかりのこの国を守るよう要請した。これを受けて国連安全保障理事会（安保理）は、平和維持軍派遣を決議した。それが、冷戦期最大となるコンゴ国連軍であった⁷。

しかし最大時 2 万人規模にまで膨れ上がり、史上最も経費を要することになる国連軍の介入にも関わらず、コンゴの混乱は収束しなかった。内戦は激化し、クーデターが相次いだ。コンゴの初代首相となった民族主義者ルムンバは、ベルギーのみならず米国と国連事務局からも疎まれ、わずか 3 ヶ月足らずで失脚し、後に暗殺された。ハマーショルド事務総長も謎の墜落事故死を遂げた。独立したカタンガの再統合の目処は立たず、コンゴ経済は常に崩壊の瀬戸際にあった。国連も財政破綻の危機に晒され続けた。米国、ヨーロッパ各国、ソ連、アジア・アフリカ諸国は、国連軍のあり方をめぐって衝突した。結局カタンガの分離独立状態が終結し、コンゴに再統合されたのは、動乱勃発から 2 年半が過ぎた 63 年 1 月であった。その間コンゴ国連軍は、カタンガに対して 3 度武力を行使することになった。

従来コンゴ動乱の歴史は、どのように叙述されてきたのか。今日では、この事件が大国の秘密干渉に彩られたことが知られている。各国政府の機密史料の公開が進んだ結果、米国、英国、ベルギー政府が、ルムンバ首相の失脚、暗殺を企図し、その後の権力構築に深く関わったことが明らかとなった⁸。また国連の公式見解は、従来、ハマーショルドの死因を搭乗機の墜落としてきたが、2015 年、国連は新史料に元づき、それが事故ではなく、何者かによる謀殺である可能性を認めた⁹。

しかし初期のコンゴ動乱研究は、事件をコンゴの国内紛争として描き出した。コンゴの独立はなぜ直ちに混乱に転じたのか。初期の研究は、この原因をベルギーの植民地統治の問題やコンゴの国内統治能力の低さに求めた。

こうした研究は、1960年代に登場したものに多い。ウィスコンシン大学のクロフォード・ヤングの『コンゴの政治』は、ベルギーの植民地諸制度が独立コンゴの政治状況に与えた影響や、国内の複雑な部族対立状況を分析した¹⁰。またブルッキングス研究所のアーネスト・レフィーバーの『コンゴ危機』は、国内紛争における国連軍の役割とその米国の貢献を解明した¹¹。これら初期研究は、総じて言えば一つの共通の特徴を持っていた。それは外部勢力の影響を過小評価したコンゴ政治の描写であった。混乱発生の原因は主としてコンゴ政府の統治能力の低さに求められ、コンゴ人政治家を主アクターとする政治史が記された。そして国連事務局や米国政府がコンゴへの干渉の事実を否定していたこともあり、その影響は十分に顧みられることはなかった¹²。

もちろんソ連や親社会主義的なアジア諸国が、西側諸国による干渉の疑念をあらわにしたように、こうした混乱の原因をコンゴ国内に求めることへの批判は当時でもみられた¹³。しかし、このような疑念は十分な考察の対象とならなかった。動乱終結後の10年間だけでも、アイゼンハワー米国大統領、マーフィー米国国務次官、ティンバーレイク在コンゴ米国大使、ハロルド・マクミラン英国首相、ガーナ部隊付英国人軍事顧問ヘンリー・アレキサンダー、ベルギー副首相ポール＝アンリ・スパークらが回顧録を公刊したが（肩書きは、コンゴ動乱当時）、いずれも西側諸国による干渉の事実への言及を避けるか、それを陰謀論だとして一蹴した¹⁴。

しかし、80年代以降、動乱の国際的文脈を重視する研究が相次いで登場した¹⁵。転機は、ベトナム戦争後の75年に実施された米国議会上院による中央情報局（CIA）の海外活動に関する調査であった。議会特別委員会（通称、フランク・チャーチ委員会）が、コンゴ、キューバ、ドミニカ、南ベトナム、チリにおける秘密工作の実態調査に乗り出したのである。そして、その報告書『外国指導者を含む暗殺計画』は、それまでジャーナリスティックな議論で囁かれてきた米国の秘密工作の存在を史料的に裏付け、ルムンバを含む5人の外国人政治家が暗殺を含む工作の対象であったことを明らかにした¹⁶。

これを受けてコンゴ動乱を国際的文脈から再検討したのが、コロンビア大学で博士号を取得したマデレイネ・カルブの『コンゴ電報』である。本書においてカルブは、米国情報自由法や『プラウダ』等の公開情報を駆使し、「古典的な冷戦対立」としてのコンゴ動乱を描き出した¹⁷。またジョン・F・ケネディ政権のガーナ大使ウィリアム・マホーニーの実子で、ケネディ大統領図書館の館長を務めたこともあるリチャード・マホーニーも、同じ時期に『JFK・アフリカの試練』を公刊し、反共主義に規定された米国のコンゴ政策の実態を論じた¹⁸。この二つの著作は、米ソ対立を軸とした冷戦の一コマとしてコンゴ動乱を位置づける本格的実証研究の先駆けとなった¹⁹。

以来、今日に至るまで、米ソ対立を軸とした冷戦の一コマとしてコンゴ動乱を位置づける潮流は根強い²⁰。2013年公開の、ルイジアナ州立大学のリセ・ナミカスの『アフリカの戦場』は、「冷戦において最も見落とされてきた危機」と主張し、旧ソ連史料に基づきコンゴをめぐる米ソ対立を描き出した²¹。また、2010年公開のロシア人歴史家セルゲイ・マゾフの『冷戦における遠方前線』も同様の立場である²²。

他方でこの事件を、植民地経済権益をめぐる米欧対立として描き出すべきだとする異論もある。

1991年、アリゾナ大学のデイヴィッド・ギブスは、『第三世界介入の政治経済学：コンゴ危機における鉱業、資金、および米国の政策』を刊行し、植民地権益をめぐるグローバルな企業間対立の構図を描き出した。また2010年刊行のロンドン・スクール・オブ・エコノミクスのジョン・ケントの『米国、国連そして脱植民地化：コンゴにおける冷戦紛争』も、独立コンゴの社会経済システムの変革をめぐる米欧対立に焦点をあてた²³。ただし両者の研究は、米ソ対立が動乱に与えた影響を完全に無視しているわけではない²⁴。

3 国連事務局の指導力の評価

以上述べたように力点の違いはあるものの、今日では、コンゴ動乱は外部勢力による干渉紛争であったとされる点では軌を一にしているといえよう。それでは、外部勢力の動向は、国連軍を指揮した国連事務局の指導力にどのような影響を与えたのか。実は、既存のコンゴ動乱史研究は、この論点にをめぐる評価が対立している。

第一のものは、外部勢力の影響を過小評価するものである。この立場は、コンゴ動乱を国内紛争と性格づけたうえで、国連事務局が公正中立な立場で紛争処理に臨んだ点を強調する。例えば、ハマーショルドの伝記を記したブリティッシュ・コロンビア大学のマーク・ザッハーは、彼が「真の国際的な国際公務員」であって、「言葉の上だけでなく、行為においても、全ての国家圧力や影響力から自由な存在」であろうとした点に注目する²⁵。また国連関係者の回顧録なども、国連事務局は、意図としては極力内政に干渉せず、中立を保とうとした点を強調する²⁶。さらに叙述の枠組みについても、比較的最近のものでは、ペーター・ヘラーやマリア・ステラ・ロニョーニの研究に見られるが、それは国連事務局が、コンゴの現地情勢の変化にいかに対応したのか、という物語を組み立てる²⁷。

これに対して、外部勢力の影響を重視するものもある。それは、国連事務局が西側陣営の利益のために奉仕したという議論である。例えば、コンゴ国連軍エリザベスヴィル代表を務めたコナー・クルーズ・オブライアンは回顧録『カタンガとの往復書簡』は、国連の活動の党派制を強く主張した²⁸。また『コンゴの裏切り』の著者ナイロビ大学のカテテ・オラワや『ルムンバの暗殺』の著者で、ベルギー人歴史家リュ・ド・ウィットは、より踏み込んで国連事務局、特にハマーショルドは中立な仲裁者ではなく、「国連は自ら望んで西側諸国による干渉の道具であろうとした」とする²⁹。これらの議論は、大国の国連事務局の影響、特に米国の動向によって国連事務局の対応が左右されたことを強調した。ただし彼ら3人の著作は、分析対象の期間が主に危機勃発後の約1年に限定され、また史料的な制約もあって動乱全体を描き出すものではなかった。

このように、コンゴ国連軍に関する評価は、その活動のコンゴ政治への干渉のありようをめぐる対立してきた。国連関係者には、今もなお第二の立場の議論を陰謀論として退ける傾向がある³⁰。しかし第一の立場に属するエヴァン・ルアードや、アンソニー・パーソンズの著作、あるいは国連の平和維持活動の歴史をまとめた『ブルーヘルメット』の叙述のように、国連事務局が内戦たるコンゴ動乱に対して中立的、仲裁的な立場で臨み、紛争解決に指導力を発揮した姿を描きだすことに歴史的妥当性はあるのだろうか³¹。また、仮に国連事務局が強い自律性を持ちえたとして、公式説明に見られる以下の評価は、可能なのだろうか。

…その目的を果たすために、国連の作戦は、議論と交渉によって、相違点を克服し、そして平和的解決方法を絶えず模索してきた。また国連は国内政治問題におけるいかなる干渉も回避するとの原則を守り続けた³²。

こうした国連の公式説明がコンゴ動乱史研究に与えた影響は大きい。最新研究のクリストファー・オセン、ウォルター・ドーン of 著作ですら、国連の公式説明と符合する議論を展開する³³。しかし、この立場の議論は実態とは異なるものである。なぜなら、本書が詳細に検証するように、各国政府の内部史料や国連事務局職員の私文書からは、国連が大国の影響を強く受けていたとする第二の立場の議論を裏付ける諸事実を確認できるからである。すなわち 1960 年からの約 3 年間、国連の対応は、現地のコンゴ情勢の変化に基づいてなされたというよりも、むしろ米国との関係を主軸とする国際政治の力学によって左右されたのである。また同時に、国連こそが一貫してコンゴ政治に外部から干渉した担い手そのものであった。

かつて、アリゾナ大学のギブスは、米国國務省の公式資料集『合衆国の対外関係 (FRUS)』には、CIA の秘密工作の事実が意図的に隠蔽される傾向があることを指摘し、論争を呼んだ³⁴。しかし同様の問題は米国政府史料にとどまらず、CIA と協力関係にあった国連事務局の公式説明にも、語られるべき事実が欠如する傾向がある³⁵。事実、2014 年のナミカスの著作の合評会において、ウィルフリッド・ローリエ大学のケヴィン・スプーナーが指摘したように、最新の研究でも、コンゴ動乱における国連の役割について、より詳細な研究が求められる学問状況が続いている³⁶。なぜ国連は干渉者たる立場に陥ったのか。また国連事務局の自律性が危機に陥ったことは、コンゴ動乱の展開にどのような影響を与え、また国連平和維持活動をどのように変質させたのか。結論を先取りすれば、国連がコンゴ動乱の干渉者に陥った根本原因は、国連軍が冷戦期最大かつ最も複雑を極め、最も経費のかかった活動であったことに求められる。そしてこの結果、国連は米国への過度の依存を余儀なくされたのである。そこで本書は、第二の立場の問題意識を引き継ぎつつ、近年の機密解除を経て、より史料実証的研究が可能になったこの問題を考察する。

4 本書の分析視角

以上のような先行研究の特徴を捉えたうえで、本書は、米国と国連の関係を主軸としてコンゴ動乱史を描き出すことを主課題とする。もちろん、このテーマを検証する場合、コンゴの国内政治により焦点をあてた分析、ベルギー、英国、フランス、ソ連といった大国、あるいはカナダ、インド、ガーナといった中小国とコンゴ関係に焦点をあてた分析などが可能であろう。しかし、本書は、この点に焦点をあてることで、後の腐敗した親米コンゴ誕生に対する米国と国連の介入の影響を浮き彫りにしたいと考えている。なぜなら国連関係者の言説には、今なお、腐敗した親米コンゴ成立に対する国連の責任を認めようとしない傾向がみられるからである³⁷。その際、次の三つの視角を分析枠組みとして設定し、国連の対米依存の深化と国連の組織防衛の論理の交錯を軸としたコンゴ動乱史を描くことにしたい。なぜなら、これこそが、米国と国連によるコンゴ協働介入の実態と理由を浮き彫りにできると考えるからである。

①「防止外交」という野心的希望

まず設定するのは、「防止外交（Preventive Diplomacy）」という野心的希望の視角である。これは、当時の国連事務局が、国連平和維持活動の成功とその制度化に、精力をあげて取り組んだことと関係する。

周知のように、第二次世界大戦の最中に誕生した国連は、力の均衡に代わる新たな安全保障システムの構築を期待された組織であった。しかし、戦後ほどなくして生じた東西冷戦の形をとった大国間対立に直面した国連は、この構築に失敗した。そして、1950年6月に勃発した朝鮮戦争で国連は、西側寄りの姿勢で北朝鮮に対する軍事的強制行動に踏み切り、世界組織としての中立性を毀損した。

53年、ハマーショルドが第二代国連事務総長に就任したが、彼は国連の信頼性の回復を重要課題とした。50年代半ば、冷戦状況に変化が現れており、これがハマーショルドの組織立て直しを後押しした。米ソの軍拡競争の結果生じた相互抑止の作用によって、米ソ間に若干の緊張緩和が訪れた。またアジア・アフリカでは新興の独立国家が続々と誕生し、55年のバンドン会議に象徴されるいわゆる第三勢力の形成が、こうした機運を促進した。ハマーショルドは、東西の大国間の協調の可能性が芽生えたところに、国連が独自政策を打ち出す余地を見いだしたのであった。

これが、ハマーショルドが唱えた「防止外交」誕生の背景であった。「防止外交」とは、国際機関研究者イニス・クロードの理解によれば、「対立する東西陣営の外側にある地域に生じた紛争や危険な情勢に対して国連がいち早く介入して、それによって大国間の力の真空を埋め、いずれの側からも手出しのできないようにし、国際緊張を緩和する国連の積極政策」である³⁸。そして、この構想をもとにハマーショルドは、「イデオロギーや、世界への影響力をめぐる大国間闘争において中立」な国連ならば、地域紛争を局地化し、大国間の抗争へ発展するのを抑止することができると公言した³⁹。

後に平和維持活動と呼称される制度の深化と、この野心的希望は不可分であった。もともと国連憲章に平和維持活動の規定はなかったが、それは慣行の積み重ねによって制度化が進んだものである。その端緒は、ハマーショルドが56年のスエズ戦争の際に組織した国連緊急軍であった。そしてスエズ、レバノンでの活動に自信を深め、「ダグに任せろ」のかけ声のもと、国際的名声を博したハマーショルドは、60年にコンゴ動乱に際してこの野心的希望をさらに押しすすめた⁴⁰。これが、介入主義的な平和維持活動、コンゴ国連軍の誕生である。彼は、コンゴ国連軍の派遣に際して次のように語った。

コンゴ作戦は、全ての方向性において、スエズの物語を遙かに超えたものとなるでしょう。もし我々が成功し、また安保理が、昨日私が報告書で展開した路線と哲学を受け入れるならば、おそらくそれは、発展途上国の歴史において、新しく、また決定的に重要な扉を開けることを意味するでしょう。…私は希望します、我々がこれに失敗する事がないことを⁴¹。

このハマーショルドの野心的希望の物語は、彼の伝記などでよく知られるものである⁴²。他方で、最近の論考では彼は、「計算高く、親西側で、そして時にマキャベリ的性格の人物」であったと評される⁴³。では誕生したばかりの平和維持活動の成功とその制度化を願う国連事務局の野心的希望は、コンゴ動乱の展開にどのような影響を与えたのか。おそらくその失敗は、国連組織そのものの信頼性を傷つけかねなかった。本書は、この点を第一の視角としたい。

②「介入資源の確保」の問題

他方、「防止外交」という野心的希望を抱く国連事務局の障害となったのは、紛争地への「介入資源の確保」の問題であった。

そもそも国連憲章に定めがなく慣行の積み重ねで作られた国連平和維持活動は、その「介入資源の確保」が政治問題化しがちであった。主権国家とは異なり国連は、国際的権威はあるものの、通貨発行権や徴税権もなければ、独自の軍事力もないという意味で、独自の権力的な源泉に乏しい組織である。それゆえ、国連事務局は、活動の内容や規模に応じて、加盟国に絶えず協力を仰がねばならなかった。また、その委託任務の履行が義務的であり、かつその内容が国連事務局に人的、技術的、財政的に負荷をかける場合、この問題は国連事務局に重くのしかかった。

例えば、国連事務局は、平和維持活動の黎明期から財源確保に苦勞し続けた。1956年にハマーショルドが国連緊急軍を組織した際、理論的にはその経費は、通常予算の分担率で加盟国に割り当てられるべきであった。しかし現実にはソ連など東欧諸国は、国連を西側寄りの組織と考え、その支払いを拒否したため、国連は、慢性的な財源不足に悩まされた。また部隊の維持、展開でも平和維持の任務に適した兵員の確保も容易でなく、国連事務局は、介入先の政治情勢に応じて、人種問題などに配慮した部隊展開をせねばならなかった。さらに国連事務局は、コンゴ国連軍の場合、現地の諜報活動、部隊の輸送、通信手段の確保などの技術面で、しばしば大国の支援を仰がねばならなかった。しかし同時に大国への依存は、国際組織の中立性の体裁を保つべき彼らに、活動の正統性の問題を突きつけた。

加えて50年代の脱植民地化の進展で、国連組織が性格を変えつつあることも国連事務局への政治的負荷となった。60年だけでアフリカの16カ国が国連に加盟し⁴⁴、国連は新興独立国の声がこれまで以上に反映されやすくなっていた。新興独立国は、国連総会を舞台として植民地問題への国連の積極的介入を求め、他方植民地利権の維持を望む旧宗主国は、国連の介入に反対した。そして新興独立国のこのような声は、総じて言えば、国連が必要とする資金、軍事力の質的量的増大を導く一方で、国連事務局は、国連の介入には消極的だが実際に財源などの資源を提供することができる大国からの支持をえるのに苦慮し続けた。例えば60年11月、国連総会行財政小委員会（第5委員会）においてハマーショルドは、次のように発言した。

国連事務局は極めて難しい立場に陥っています。一方で、事務局は総会や安全保障理事会が決定した政策を「精力的」に遂行せねばなりません。その一方で、事務局は、組織が直面する現状において、これら決定に伴う財政上の問題に、継続的に取り組まなくてはなりません。もちろん、この組織は、二つの方向性の間で引き裂かれるわけにはいかないのです⁴⁵。

要するに国連事務局は、コンゴ動乱をめぐり為すべきことと為しうることの間のジレンマに直面していたのである。では国連の「介入資源の確保」の問題は、コンゴ動乱の展開にどのような影響を与えたのか。この問題もまた、国連組織の存続可能性を揺るがす効果をもったはずである。例えば、コンゴの活動のために、国連が深刻な財政危機に直面したことは比較的良好に知られている⁴⁶。しかもそれは、第3代国連事務総長ウ・タントによれば、「まさしくその存亡がかかった、この組織の歴史上最も深刻な内部紛争」であった⁴⁷。しかし奇妙なことに、「聖人伝」的な国連事務総長に関する伝記はもとより、史料実証的なコンゴ動乱研究ですら、この問題が与えたコンゴ動乱の個別局面への影響に対しては考察が深められない傾向があった⁴⁸。そこで本書は、「防止外交の野心的希望」

を実現する上で実質的限界を設定したと考えられるこの点に焦点をあて、第二の視角とする。

③米国という「構造的権力」の問題

さらに重要な視角は、「介入資源の確保」に苦しむ国連事務局にとって、大国としてほぼ唯一の支援国となった米国の「構造的権力」の問題である。この場合の「構造的権力」とは、米国が様々な経路を通じて国連事務局とコンゴ双方の情勢に強い影響力を行使し、親米コンゴの形成に向けて、国連軍の活動を管理するパワーを意味する⁴⁹。

この点で強調すべきは、米国の国連への権力関係は、歴史的に構築されたものだということである。例えば、国連は第二次世界大戦の連合国を母体とする組織であり、この経緯から、1960年当時の米国は、安全保障理事会において拒否権を持つことはもとより、5常任理事国の4カ国、6非常任理事国の3カ国を親西側勢力で占めることができた。また総会でも、12カ国の支持を得るだけで、全議席の3分の2を親西側勢力で固めることができた。さらに米国は西側同盟国とともに、国連事務局の100のトップポジションのうち、ほぼ半数を押さえた。加えて財政面でも米国は、国連通常予算のみならず、平和維持活動予算の半分近くを1国で拠出した。しかも米国だけがコンゴ国連軍の部隊の維持、展開に必要な物資や輸送サービスを大規模に提供できた⁵⁰。こうした事情のもと米国は、他の加盟国にはない国連事務局に対する優位性を持ったのである。

しかも米国は、コンゴでは資金規模でCIA史上最大で成功例の一つと評された秘密工作を展開した⁵¹。この点は、本書との関係では、平和維持活動の行動準則たる同意原則に関わって重要である。よく知られるように平和維持軍は、受入国からの要請と同意に基づいて当該国に駐留できる。そしてハマーショルドも、この原則を公言し、法的にはコンゴ政府の要請と同意に基づき、国連軍を駐留させた。これに対して秘密工作を通じて現地の政治情勢に強い影響力を行使できた米国は、コンゴ側の要請や同意形成に重要な役割を果たした。なぜなら米国は、クーデター支援や現地政治家の買収といった秘密工作を通じて、国連軍の撤退を望む政治家の権力掌握を阻止し続けたからである。

これが米国の「構造的権力」の内実であった。後に詳細に議論するが、米国は財政危機下の国連に対して、資金提供等を通じて国連事務局の人事に直接影響を与え、同時にコンゴの政治情勢を操作し、間接的に国連事務局の動きを規定した。この結果国連事務局には、米国が望む親米コンゴ樹立への協力以外の現実的選択肢はなかった。また国連に対して米国が「構造的権力」を有したために、政府と議会の対立といったワシントンの政治が国連の活動を直接左右した。

もちろん、国連事務局が米国と常に一体的に行動したわけではない。ではどのような場合、彼らの自律性は担保されたのか。また「介入資源の確保」に苦しむ国連の対米依存が深まるにつれて、活動の正統性が損なわれる問題も発生した。この対米依存の深化は、正統性をめぐる国際組織の防衛という別の問題を生じさせたが、この問題は国連軍の活動にどのような影響を与えたのか。本書はこれらの点を踏まえつつ、米国が国連事務局の指導力に与えた影響を考察する。特に国連事務局の秘密工作への協力の問題については、英国人の元国連事務次長ブライアン・アークハートなどの国連関係者が、その事実を否定してきた経緯もあり、詳細な実証が必要である。これが第三の視角である。

5 構成と各章の課題

本書は、以上述べた三つの視角から、米国と国連の協働介入史としてのコンゴ動乱とそれが国連平和維持活動の制度化に与えた余波を描き出す。その際先行研究との関係で強調されることの一つは、東西冷戦が与えた影響の相対化である。本書はコンゴ動乱を、国際面で言えば、二つの複合危機であったと位置づける。一つは、コンゴの中央政府をめぐる民族主義路線と親米路線の対立である。今ひとつが、カタンガ州の分離独立問題をめぐる国際紛争である。前者においては、確かに冷戦の影響がはっきりと見て取れる。ルムンバ首相はソ連からの支援を求め、米国はコンゴが共産主義陣営に取り込まれてしまう可能性を懸念し、コンゴに親米政権を樹立すべく介入することになったからである。また米国の政策決定者の多くが冷戦思考にとらわれていたことは間違いない。だが後者のカタンガ分離問題の文脈においては、東西冷戦の影響は部分的なものであった。とりわけ本書は、カタンガ分離独立問題をめぐる国際紛争がコンゴ動乱のより本質的な部分であったとみなし、この事件の発生、展開、終結の過程では、国連という組織が持つ独自の力学こそが、紛争の展開に決定的影響を与えたことを強調したい。

すなわちこの事件には、「防止外交」の野心的構想を端緒とし、国連事務局の「介入資源の確保」の問題を背景とした米国への過度の依存、そして国連軍の活動を失敗させられないという国連の組織防衛論理が、一貫した影響を与えていた点である。言い換えると、干渉者たる国連の実態を1次史料に基づいて実証し、その事実の発生の政治的理由を考察し、加えて国連事務局の自律性の揺らぎが動乱の展開に与えた影響を分析するのが本書の目的である。以下、構成と各章の課題を設定する。

まずコンゴ動乱は、ベルギーの植民地統治の負の遺産と不可分の紛争であった。そこで第1部の第1章から第3章は、主に二次文献に依拠し、コンゴ動乱の前史を論じる。第1章では、読者にはややなじみが薄いであろうベルギーによる植民地統治の実態を概観し、後の展開を規定した植民地をめぐる莫大な富の問題とコンゴ民族主義の勃興の過程を描く。第2章では、動乱勃発時の展開を、ベルギーの対応に焦点をあてて分析する。ここでは、カタンガの分離独立を核とする動乱の勃発が、協力者獲得の失敗のなかで、なおかつ植民地利権を維持しようとするベルギーの政策と不可分であったことが論じられる。第3章では、1950年代の米国アイゼンハワー政権の、ベルギー領コンゴ政策の特質を考察する。ここでは、新興独立国において権威主義的体制の樹立を好む傾向を持っていた米国が、なぜコンゴでは国連軍の介入を支持したのか、その国連利用の起源を論じる。

本書の中心部分を為す第4章から第8章は、国連軍が、米国の秘密工作と一体化しつつ、コンゴに親米政権を樹立、維持する活動を行い続けたことを実証する。全章を通じて描き出されるのは、上記の三つの視座の交錯と、米国への依存を深めながらも、活動を失敗させられないとする国連組織防衛の論理である。まず第2部の第4章から第6章は、主にコンゴの中央政府をめぐる民族主義路線と親米路線の対立が扱われる。この3章が扱うのは、ソ連のコンゴ介入の問題が、米国政府高官及び国連事務局の上級職員に比較的深刻に受け止められた、1960年6月から61年7月までの時期である。

第4章では、国連が反ルムンバ秘密工作を積極的に支援した事実を論じる。1960年6月の独立後、当初ルムンバ首相は、ベルギーに対抗するため国連の支援を期待した。しかしそれが失望に変わる

と、ルムンバはソ連の武器提供とルムンバの国連軍撤退要請を模索し始める。そして米国とベルギーは反ルムンバ秘密工作を開始し、ハマーショルドを含む国連事務局上層部もそれを手助けすることになるのである。とりわけこの章では、国連軍の指揮を担った国連事務局職員の多くが、米国政府の諜報活動の経歴を持つ者であったこと、また反ルムンバ・クーデターをめぐる国連事務局の中立性の言説が、当初から偽りに満ちていたことを、史料的に明らかにする。なかでも先行研究との関係で重要な指摘は、国連安保理の委託任務の履行が、ルムンバ失脚をめぐる米・ベルギー間の密約に担保されていたことである。

第5章では、ニューヨークを舞台にした権力政治の展開が、失脚後のルムンバを死に至らしめた過程を実証する。ここでは、ハマーショルドが、ソ連のプロパガンダ攻勢に晒され、「介入資源の確保」に苦しみながらも、国連の中立性の体裁を保とうと試みた点に焦点があてられる。しかし本章では、この試みですら国連への財政支援を梃子とした米英の圧力によって封じられたこと、更に両国との摩擦が、ルムンバ暗殺の条件を整えたことを明らかにする。なかでも国連関係者は、この時期に米英が財政問題を梃子に彼に圧力を加えたことについて、これまで意識的に議論を回避してきた。そこで、この事実を米英の史料から実証する。

第6章では、アイゼンハワーの後を継いだケネディ政権が、再度国連事務局と協働しつつ、ルムンバ後のコンゴに、親米政権を樹立した過程を明らかにする。その際米国にとって不都合な人物が、国連軍の活動から排除され、後任に秘密工作に協力する人物が据えられたことを実証する。これも、国連の公式説明において今日でも否定される事実である。そしてここまでの叙述において、国連事務局のコンゴ政策は、国連関係者の言説に見られるようなハマーショルドの高い指導力の帰結ではなく、むしろ、親米政権の樹立を目指す米国の動向に引きずられたものであることが明らかにされる。

続く第3部の第7章と第8章は、カタンガ分離独立問題をめぐる国際紛争について61年8月から63年1月までを扱う。ソ連介入の問題が後退し、むしろ「米国の事業としてのコンゴ国連軍」をめぐる米欧対立や、中印国境紛争といった東西冷戦とは文脈を異にする問題が危機の動向に影響を与えた時期であり、国連と米国が協働で作上げた親米政権の生き残りをかけて、両者がカタンガの分離独立状態の終結に動き出す過程を論じる。この時期、米国と国連事務局の秘密工作が功を奏し、ソ連の介入の可能性が低まった。しかし他方で、「米国の事業」としての性格を強める国連軍をめぐる、米欧諸国は激しく対立する。そこではソ連ではなく、植民地利権を有するベルギーやイギリス、フランスなどのヨーロッパの同盟国が影響力の低下を恐れ、米国の影をうかがわせる国連の植民地問題への介入に強く反発し、それが国連の「介入資源の確保」の大きな障害になるのである。そこで第7章では、カタンガに対して、軍事的、経済的に圧力をかける試みが、なぜ繰り返し挫折させられたのかとの問いを、「介入資源の確保」の問題から考察する。

第8章では、さらに踏み込んで、コンゴ動乱末期の国連事務局が、財源確保に加えて、派遣部隊確保や法的正当性といった別の「介入資源の確保」の問題に苦しんだこと、この結果、キューバ危機や中印国境紛争といったコンゴ問題とは本来直接結びつかないこれらの事件が、米国の動向と並んで、カタンガ分離終結に向けた国連事務局の指導力のあり方に強い影響を与えたことを明らかにする。そして第4章から第8章までの叙述を通じて、コンゴ動乱史は、現地情勢をめぐる国連軍の対応や冷戦という枠組みだけでは捉えきれないことを実証する。

加えて、補論的な第 9 章では、コンゴ動乱がもたらした帰結を、国連史の文脈で再検討する。特に「介入資源の確保」の問題のうちの財源確保の問題が、後の国連平和維持活動のあり方に決定的影響を与えたことを明らかにする。国連の財政危機は、カタンガのコンゴへの再統合後も一層深刻化した。米国はその問題を国連平和維持活動の恒久財源化によって解決することを目指した。しかしその政策は、経費未払い国のソ連ではなく、むしろ新興独立国の大量加盟によって生じた国連の質的变化に直面し挫折する。コンゴでは親米政権の樹立を成功させた米国が、その後の国連外交では敗北する過程を本章は描くことになる。

最後に、本書が利用した史料、および表記について述べておきたい。近年、各国政府史料の解禁を受けて、コンゴ動乱に関する研究書や論文の刊行が相次いでおり、問題意識の点で異なるものの、本書もそれら研究の恩恵に浴している。詳細な史料、文献一覧は、本書の末尾に付す。また筆者は、執筆にあたり、2000 年の米国留学以来、米国のアイゼンハワー、ケネディ、リンドン・B・ジョンソンの各大統領図書館、国立公文書記録管理局、米国議会図書館、国際連合資料館、カルフォルニア大学ロサンゼルス校、コロンビア大学、ジョージ・ワシントン大学、スタンフォード大学フーバー研究所の各図書館、英国の国立公文書館などで史料収集を行った。これらの史料に加えて、アリゾナ大学のギブス、ノースカロライナ州立大学のキャロライン・ブルーデン、ベルギー人歴史家ド・ウィットといった先生方からも数々の史料を譲り受けた。なおコンゴの地名は、これまで度々変わったが（例えば、独立時の国名はコンゴ共和国、1967 年からは 71 年までは、コンゴ民主共和国、71 年から 97 年まではザイル共和国、97 年以降は再びコンゴ民主共和国）、本書は、独立当時の名称を使用し、また日付は、米国、英国、コンゴ等の時差を踏まえて、可能な限り米国東部標準時で揃えた。

※本稿の執筆にあたり、平成 27 年度札幌大学個人研究助成を受けた。

- 1 マーク・マゾワー『国際協調の先駆者たち—理想と現実の 200 年』（NTT 出版、2015 年）107 頁。
- 2 例えばケネディ政権において在エリザベスヴィル米国総領事のジョナサン・ディーンは、活動の「過去 3 年間のほとんどを通じて、国連は米国のエージェントとして活動した」と評した。HIA, Ernest W. Lefever papers, Box 4, Note on Conversation with Jonathan Dean, U. S. Consul General to Elizabethville, August 30 1963.
- 3 この場合の「構造的権力」とは、国連軍および文民支援活動経費の大半を負担し、空輸業務のほとんどを請け負う米国が、コンゴ国内政治に介入しつつ、また国連軍の動向を監視するためにほぼ毎日国連事務局と接触し続けることで、国連の紛争処理過程を操作しえた立場にあった事実を指す。JFKL, NSF, Countries, Box 28A, Memo, "US control over resumption of hostilities in the Katanga", December 17 1962.
- 4 HIA, Ernest W. Lefever papers, Box 4, Conversation with Ambassador Edmund Gullion, 11:30 to 1:30 August 22 1963.
- 5 「道具」という表現は、米国政府史料に様々な形で現れており、米国政府高官の国連に対する基本認識であった。例えばある史料は、「(米国は：筆者) …、…我々が、世界の混乱や紛争の根源の多くに対処するための助力としての重要な道具として…、国連の活動を支援した」と記す。LBJL, SDAH, 1968, Vol I, Chapter X, The United Nations, Box 4, The United Nations, undated, p.2.
- 6 スタナードの研究は、このようなイメージを作り出したベルギーのプロパガンダ戦略を描き出す好著である。Matthew G. Stanard, *Selling the Congo: A History of European Pro-Empire Propaganda and the Making of Belgian Imperialism* (Lincoln, University of Nebraska Press, 2011) .
- 7 1960 年 7 月から 64 年 6 月までの間で、コンゴ国連軍には、最大時 2 万人、述べ 67 万 5000 人の兵員、34 カ国からの部隊が参加し、また合計 41100 万ドルの経費がかかった。Ernest W. Lefever, *Uncertain Mandate: Politics of the U. N. Congo Operation* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1967) , p.3.
- 8 Ludo De Witte, *The assassination of Lumumba* (London: Verso, 2001) ; Calder Walton, *Empire of Secrets: British Intelligence, the Cold War, and the Twilight of Empire* (London: Harper Press, 2013) ; Emmanuel Gerard and Bruce Kuklick, *Death in the Congo: Murdering Patrice Lumumba* (Cambridge: Harvard University Press, 2015) .
- 9 Suzan Williams, *Who Killed Hammaraskjold? : The UN, the Cold War and White Supremacy in Africa* (London: Hurst & Co.,

- 2011) ; UN, A/70/132 - Report of the Independent Panel of Experts established pursuant to General Assembly resolution 69/246, July 6 2015.
- 10 Crawford Young, *Politics in the Congo* (Princeton: Princeton University Press, 1965) .
- 11 Ernest W. Lefever, *Crisis in the Congo: A United Nations Force in Action* (Washington, DC: The Brookings Institution, 1965) .
- 12 ヤングは、国連等の外部要因は部分的かつ周辺的扱いにとどめると記し、コンゴ国内政治の特質の析出に専念した。Young, *Politics in the Congo*, pp.7-9; Lefever, *Crisis in the Congo*, pp.42-45, 47. ただしヤングやレフィーバーは米国政府の協力者であったことから、彼らが干渉の問題を全く知らなかったとは考えがたい。ヤングは、ハーバード大学で博士号を取得すると直ちに、米国政府のコンゴ政策策定の協力者になった。また後にロナルド・レーガン政権の国務次官補代理にノミネートされるレフィーバーも、国務省や国防総省の資金協力を得て、コンゴ国連軍に関する受託研究の責任者であった。NARA, RG84, RFSPDS, CGR, 1934-1963, Box 15 (Old 8) , January 63-June 63, Internal Research Report, Memo, "RAF Research on the Congo", March 4 1963; HIA, Ernest W. Lefever papers, Box 4, U.S. Interviews on the Congo August 1963- May 1965, Congo-ACDA Study; Lefever, *Uncertain Mandate*, pp.xiv-xv.
- 13 例えばソ連は、国連総会などの場を借りて、コンゴ動乱の本質を「傀儡」を通じたベルギーの侵略に求めると主張した。詳細は本書 5 章を参照。また西側諸国でも、ジャーナリストのアンドリュウ・タリーが、62 年に米国の秘密工作の事実を暴露した。Andrew Tully, *CIA: The Inside Story* (New York: William Morrow and Co., 1962) , pp.178-187.
- 14 Dwight D. Eisenhower, *Waging Peace: The White House Years* (New York: Doubleday and Co., 1965) , pp.571-583; Robert Murphy, *Diplomat Among Warriors* (New York: Doubleday, 1964) , pp.324-338; Clare Hayes Timberlake, *First Year of Independence in the Congo* (Unpublished Master's thesis, George Washington University, 1963) ; Harold Macmillan, *Pointing the Way 1959-1961* (London: Macmillan, 1972) , pp.239-240, 259-284; Henry T. Alexander, *African Tightrope: My two years as Nkrumah's Chief of Staff* (New York: Praeger, 1966) , pp.33-87; Paul-Henri Spaak, *The Continuing Battle: Memoirs of A European 1936-1966* (Boston: Little Brown and Company, 1971) , pp.357-401.
- 15 研究史的には、英国王立国際問題研究所のキャサリン・ホスキンスが、国内紛争と国際対立の双方を接合する端緒を担った。彼女の代表的著作『独立以後のコンゴ』は、同事件を国内外の出来事の相互作用のなかで捉える意欲作であった。またレフィーバーも、『コンゴ危機』公刊後に考察を深め、続編『不確かな委託任務』では、危機の国際的側面に焦点をあてた。ただしこの二つの著作には、史料的な制約もあり、国内政治に対する外部からの干渉については、可能性を指摘するにとどまった。Catherine Hoskyns, *The Congo since Independence: January 1960-December 1961* (London: Oxford University Press, 1965) ; Lefever, *Uncertain Mandate*.
- 16 U.S. Congress, Senate Select Committee To Study Governmental Operations With Respect to Intelligence Activities, *Alleged Assassination Plots Involving Foreign Leaders: An Interim Report. Senate Report No. 94-465, 94th Congress, 1st Session* (Washington: U.S. Government Printing Office, 1975) .
- 17 Madeleine Kalb, *The Congo Cables: The Cold War in Africa-From Eisenhower to Kennedy* (New York: MacMillan, 1982) , p.XIV.
- 18 Richard Mahoney, *JFK: Ordeal in Africa* (New York: Oxford University Press, 1983) , p.244.
- 19 ただし同じ問題意識の研究は、70 年代に現れていた。先鞭はシカゴ大学でハンス・モーゲンソーの指導を受け、同大学で政治学博士号を取得したステファン・ワイズマンの研究である。彼は米国議会職員としての経験を積んだ人物だが、74 年に『コンゴにおける米国の対外政策：1960 年－1964 年』を出版し、反共主義に動機づけられた米国の対外政策の文脈から、コンゴ動乱を描き出した。ただし資料面では、同書が執筆された当時、チャーチ委員会の調査結果は未公表であり、彼は聞き取り調査で事実関係の裏付けを取らざるをえなかった。とはいえ本書が描いた事件の基本的構図は、今日でも高い学術的意義があり、筆者はマホーニーの著作と並んで、本書を最も分析的な研究の一つと位置づける。Stephen R. Weissman, *American Foreign Policy in the Congo, 1960-1964* (Ithaca: Cornell University Press, 1974) .
- 20 90 年代に入ると、アフリカ民主化の問題意識からの研究が相次いだ。なかでも注目すべきは、コンゴ独裁者モブツと米国の歴史的関係を取り扱ったマイケル・シャッツバーグの『モブツかカオスか』と、シーン・ケリーの『米国の暴君』である。二つの著作は、CIA の介入過程の再検討を行うことで、モブツ独裁体制の出自を洗い直した。Michael G. Schatzberg, *Mobutu or Chaos? : The United States and Zaire, 1960-1990* (Lanham, Md: University Press of America, 1991) ; Sean Kelly, *America's Tyrant: The CIA and Mobutu of Zaire* (Lanham, Md: The American University Press, 1993) .
- 21 Lise A. Namikas, *Battleground Africa: Cold War in the Congo, 1960-1965* (Stanford: Stanford University Press, 2013) , p.9.
- 22 Sergey Mazov, *A Distant Front in the Cold War: The USSR in West Africa and the Congo, 1956-1964* (Stanford: Stanford University Press, 2010) .
- 23 David N. Gibbs, *The Political Economy of Third World Intervention: Mines, Money, and U.S. Policy in the Congo Crisis* (Chicago: The University of Chicago Press, 1991) ; John Kent, *America, the UN and Decolonization: Cold war conflict in the Congo* (London: Routledge, 2010) .
- 24 Gibbs, *The Political Economy of Third World Intervention*, pp.196-98; Kent, *America, the UN and Decolonization: Cold war conflict in the Congo*, p.1; John Kent, "Lumumba and the Congo Crisis: Cold War and the Neo-Colonialism of Belgian Decolonization", Miguel Bandeira Jerónimo and António Costa Pinto eds., *The Ends of European Colonial Empires: Cases and Comparisons* (London: Palgrave Macmillan, 2015) , pp.218-242.

- 25 Mark W. Zacher, *Dag Hammarskjöld's United Nations* (New York: Columbia University Press, 1970), pp.39, 151-171. この立場は事件をコンゴの国内紛争として位置づける研究と親和性を持つ。例えばレフィーバーは「様々な圧力に抗して、ハマースホルドは明確に一貫した路線を追求した。…彼は不偏不党の国際公務員たろうと試みた」と記す。Lefever, *Crisis in the Congo*, pp.23, 26.
- 26 Brian Urquhart, *Hammarskjöld* (New York: Alfred A. Knopf, 1972), pp. 404, 407, 438-456, 562; Indarjit Rikhye, *Military Adviser to the Secretary-General: U.N. Peacekeeping and the Congo Crisis* (London: Hurst and Co., 1993), p.91; U Thant, *View from the UN* (London: Newton Abbot, 1977), pp.95-153.
- 27 Peter B. Heller, *The United Nations under Dag Hammarskjöld* (Lanham, Md: Scarecrow Press, 2001), pp.115-146; Maria Stella Rognoni, "Dag Hammarskjöld and the Congo crisis, 1960-1961", Carsten Stahn and Henning Melber, *Peace Diplomacy, Global Justice and International Agency: Rethinking Human Security and Ethics in the Spirit of Dag Hammarskjöld* (Cambridge: Cambridge University Press, 2014), pp.193-215.
- 28 Conor Cruise O'Brien, *To Katanga and back: A UN case history* (New York: Simon and Schuster, 1962). なお国連事務局は、オブライアンの『カタンガとの往復書簡』に関して、同書の内容が多くの事実において誤っており、その解釈は偏向しているとの異例の抗議を新聞紙上で行った。Daily Telegraph, November 12 1962.
- 29 De Witte, *The assassination of Lumumba*, p.xx; Katete D. Orwa, *The Congo betrayal: the UN-US and Lumumba* (Nairobi: Kenya Literature Bureau, 1985), p.ix.
- 30 Stahn and Melber, *Peace Diplomacy, Global Justice and International Agency*, p.272.
- 31 Anthony Parsons, *From Cold War to Hot Peace: UN Interventions 1947-1995* (London, Penguin Books 1995), pp.76-93; Evan Luard, *A History of The United Nations, vol 2: The Age of Decolonization, 1955-1965* (New York: Macmillan, 1989), pp.217-316; The United Nations, *The Blue Helmets: A Review of United Nations Peace-Keeping* (New York: The United Nations Department of Public Information, 1996), pp.175-199.
- 32 The United Nations, *The United Nations and the Congo: Some Salient Facts*, 1963, p.4; U Thant, *View from the UN*, p.106. 同様の記述は、ウ・タント・国際連合広報局編『世界平和のために』（世界市場開発, 1972 年）150 頁にもある。
- 33 オセンの著作には、カタンガ分離の内実を知るうえで興味深い叙述が多々ある。しかし、資料的には 2 次文献に多くを負っており、実証面に疑問が残る。Christopher Othen, *Katanga 1960-63: Mercenaries, Spies and the African Nation That Waged War on the World* (London: The History Press Ltd, 2015), p.67; Walter Dorn, "The UN's First "Air Force": Peacekeepers in Combat, Congo 1960-64", *The Journal of Military History*, 77, 2013, p.1405.
- 34 David N. Gibbs, "Let Us Forget Unpleasant Memories: The U.S. State Department's Analysis of the Congo Crisis", *Journal of Modern African Studies*, 33, no. 1, 1995, pp. 175-180; "Misrepresenting the Congo Crisis", *African Affairs: Journal of the Royal African Society*, 95, no. 380, 1996, pp. 453-459. この指摘を受けてジョンソン政権期の FRUS のコンゴ動乱を扱う巻(Vol. XXIII Congo)の公刊は、当初予定よりも 10 年以上遅れ、2013 年末となった。また同巻はアイゼンハワー、ケネディ政権期の FRUS に未収録の史料が、遑って収録される異例の巻となった。
- 35 ハマースホルドの側近として国連軍を指揮したインド人のラジェシュワル・ダヤルは、大国による干渉の事実が明らかにされた後、回顧録を書き改めねばならなかった。Dayal, Rajeshwar, *Mission for Hammarskjöld: The Congo Crisis* (Princeton: Princeton University Press, 1976); *A Life of Our Times* (New Delhi: Orient Longman, 1998) .
- 36 H-Diplo-ISSF Forum, on "Battleground Africa: Cold War in the Congo 1960-1965", *H-Diplo-ISSF Forum*, XV, no.35, May 19 2014, p.20.
- 37 例えばフランス人の元国連事務次長ジャン・マリー・ゲーノは、「統一されたコンゴはモブツ大統領によって私物化され、汚職にまみれ、独裁的で腐敗していた。このような結果は、国連のせいではない」と述べる。ステン・アスク『世界平和への冒険旅行ーダグ・ハマースホルドと国連の未来』（新評論, 2013 年）273 頁。
- 38 Inis L. Claude, *Swords into Plowshares: The Problems and Progress of International Organization* (New York: Random House, 1988), p.313.
- 39 *PPSGUN*, vol V, Introduction to the Fifteenth Annual Report, New York, August 31 1960, pp.122-141.
- 40 Indarjit Rikhye, "Hammarskjöld and PeaceKeeping", Robert S. Jordan, ed., *Dag Hammarskjöld Revisited: The UN Secretary-General As a Force in World Politics* (Durham: Carolina Academic Press, 1983), pp.77-109.
- 41 National Library of Sweden, MSL179:155, Outgoing Code Cable from Hammarskjöld to de Seynes, July 19 1960, cited in Stahn and Melber, *Peace Diplomacy, Global Justice and International Agency*, p.195.
- 42 ハマースホルドの構想や精神的内面を知る上で手がかりになる最新の研究には、ロジャー・リップシーの著作を挙げられる。Roger Lipsey, *Hammarskjöld: A Life* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2013) .
- 43 Kennedy, Michael and Art Magennis, *Ireland, the United Nations and the Congo* (Portland: Four Courts Press, 2014), p.16; Michael Ignatieff, "The Faith of Hero", *New York Review of Books*, November 7 2013.
- 44 この年の新加盟国は以下の通り。カメルーン、トーゴ、マダガスカル、ソマリア、コンゴ（レオポルドヴィル）、ダホメ、ニジェール、上ボルタ、象牙海岸、チャド、コンゴ（ブラザヴィル）、ガボン、中央アフリカ、キプロス、セネガル、マリ、ナイジェリア。外務省国際連合局政治課『国際連合第一 5 総会の事業』（上巻, 1961 年）5 頁。
- 45 U.N. Doc. A/C. 5/843, November 21 1960, cited in John G. Stoessinger and Associates, *Financing the United Nations System* (Washington, D.C.; the Brookings Institution, 1964), p.115.
- 46 Adam Roberts and Benedict Kingsbury, *United Nations, Divided World: The UN's Roles in International Relations* (Oxford: Clarendon Press, 1993), pp.197-200; Arthur H. House, *The U.N. in the Congo: The Political and Civilian Efforts* (Washington, DC: University Press of America, 1978), p.3; Bernard J. Firestone, *The United Nations under U Thant, 1961-1971* (Lanham,

- Md: The Scarecrow Press, 2001) , pp.62-67; Edward C. Luck, *Mixed Messages: American Politics and International Organization 1919-1999* (Washington, DC: The Brookings Institution, 1999) , pp.226-253; Lefever, *Uncertain Mandate*, pp. 199-206, 236-237; Lefever, *Crisis in the Congo*, pp.15, 159-162; Neil Briscoe, *Britain and UN Peacekeeping, 1948-1967* (New York: Palgrave Macmillan, 2003) , pp.146-147; Kevin A. Spooner, *Canada, the Congo Crisis, and UN Peacekeeping, 1960-1964* (Vancouver: UBC Press, 2009) , pp.113-115, 151-152, 173-174; Stoessinger and Associates, *Financing the United Nations System*, pp.76-78; William J. Durch eds., *The Evolution of UN peacekeeping: Case Studies and Comparative Analysis* (London, Palgrave Macmillan1993) , pp.329-332. 田所昌幸『国連財政—予算から見た国連の実像』(有斐閣, 1996 年) 34 ~ 53 頁。
- 47 U Thant, View from the UN (London: Newton Abbot, 1977) , p.86.
- 48 コンゴ動乱の史料実証研究のなかで、カルプ、ギブスの著作、アークハートの『ハマーショルド』や2013 年公刊のリプシーの伝記、14 年のスターンとメルベル編の論文集、さらには15 年公刊のジェラルドとククルックの著作でも、索引欄に国連財政、国連公債等の項目がなく、マホーニーの著作で2 項目、最新研究のケント、ナミカスの著作ですら、3, 4 項目の言及があるにすぎない。比較的多めなのが英国の関わりを論じたアラン・ジェームスの著作だが、それでも6 項目である。Alan James, *Britain and the Congo Crisis, 1960-1963* (London: Macmillan, 1996) .
- 49 この概念は、国際政治経済学者スーザン・ストレンジの議論に示唆を得ている。ストレンジは、「構造的権力とは、どのように物事が行われるべきかを定める権力、すなわち国家、国家相互、または国家と人民、国家と企業等の関係を決まる枠組みを形づくる権力、を与えるもの」とするが、コンゴ動乱においては、米国こそが親米コンゴの形成という枠組みをコンゴ政府と国連事務局との関係において設定しうる立場にあった。スーザン・ストレンジ『国際政治経済学入門—国家と市場』(東洋経済新報社, 1994 年) 38 頁。
- 50 国連軍部隊の輸送支援計画の5 分の4 を担ったのが米国であった。しかもそれは、63 年3 月当時、航続距離や時間において史上最大であり、48 年のベルリン空輸に比してもナビゲーション面などで困難な作戦であったとされた。NARA, RG84, RFSPDS, USUNCSF, 1946-1963, Congo, Box 80, Memo untitled (02430000233) , March 19 1963; PPPUS, 1962, The President's News Conference of February 71 1962, p.124; Lefever, *Uncertain Mandate*, p.202.
- 51 60 年から68 年で用いられた金額は、現在のドルに換算して9000 億から1 億5000 万ドルとされるほど大規模なものであった。Stephen R. Weissman, "What Really Happened in Congo: The CIA, the Murder of Lumumba, and the Rise of Mobutu", *Foreign Affairs*, July-August 2014, pp.14-24; George W. Ball et al., "Should the U.S. Fight Secret Wars? Overt Talk on Covert Action", *Harper's*, September 1984, p.36; Kalb, *The Congo Cables*; pp.XI-XVII; Kelly, *America's Tyrant*, pp.27-73; Mahoney, *JFK*, pp.34-58; Namikas, *Battleground Africa*, pp.97-126.